

International Exchange from Irabu, the Island
of the Sashiba(Grey-faced Buzzard), Okinawa, Japan
サシバの島・伊良部から発信する国際交流

Former Distinguished Visiting Professor
Chang Jung Christian University, Taiwan

Katsumori Kugai

元台湾・長榮大學 特別招聘教授
久貝 勝盛

Abstract

Until the late 1980s, there was no end to the poaching of Sashibas(Grey-faced Buzzards) in Irabu Islands which have long been known for its mass migration of Sashibas(Grey-faced Buzzards) to the area. In 1993, the former Irabu Town organized the "First Forum for the Protection of the Sashiba(Grey-faced Buzzard) as a Friend". The following year (1994), Okinawa Prefecture, the former Irabu Town Board of Education, and the Sashiba wa Tomodachi (The Sashiba is a Friend) Promotion Council jointly held the "Sashiba(Grey-faced Buzzard) is Friend Summit. Elementary schools in Gama-gori City, Aichi Prefecture, which is known as one of the best mass transit points in Japan, also participated in the event, and there was a lively exchange of opinions and exchange meetings. As a result, poaching of the Sashiba(Grey-faced Buzzard) was completely eliminated in 2009. In October 2021, an International Sashiba (Grey-faced Buzzard)Summit was held in Miyakojima City to support the conservation efforts, and islanders and students came to recognize the Sashiba(Grey-faced Buzzard) as an island treasure.

The first International Sashiba(Grey-faced Buzzard) Summit was held in Ichikai-machi, Tochigi Prefecture on May 25-26, 2019. The second was held in Miyakojima City on October 16-17, 2021 (scheduled to be held in 2020 but postponed due to the Corona disaster). The third was held in Manjhau, Taiwan on October 13-14, 2023, and the fourth in Sanchez Mira, Philippines on March 24-25, 2024.

With each summit, the number of participating countries increases, the substance of the summit itself becomes richer, and momentum for the protection of the Sashiba(Gey-faced Buzzard) grows. The participation of countries such as Korea, Thailand, and Malaysia, which are the flyway countries for the Sashiba(Grey-faced Buzzard), has greatly contributed to the strong promotion of the idea of Sashiba (Grey-faced Buzzard)conservation.

Conservation activities in Taiwan and the Philippines are also on track, and poaching of Sashiba(Grey-faced Buzzard) has been reduced to near zero.

Once again, I would like to thank the Nature Conservation Society of Japan, the Wild Bird Society of Japan, the Japanese Society for Preservation of Birds, and the Asian Birds of Prey Network, all of whom have been instrumental in organizing the International Sashiba (Greyfaced Buzzard) Summit.

はじめに

昔からサシバの集団渡来地として知られる伊良部では、1980年代後半までサシバ密猟が跡を絶たなかった。そのことに胸を痛めた伊良部小中の生徒たちや父母会が中心になって本格的な保護運動を展開した。1993年には、旧伊良部町の音頭取りで「第一回サシバは友だちフォーラム」が開催された。その翌年(1994年)には、沖縄県、旧伊良部町教育委員会、サシバは友だち推進会議共催で「サシバは友だちサミット」を開催した。国内有数の集団通過地点で知られる愛知県浦郡市の小学校も参加し、活発な意見校交換や交流会が持たれた。その結果、2009年にはサシバ密猟は完全に無くなった。その保護活動をサポートする形で2021年10月に宮古島市で国際サシバサミットが開催され、島民や生徒たちはサシバを島の宝物として再認識するようになった。

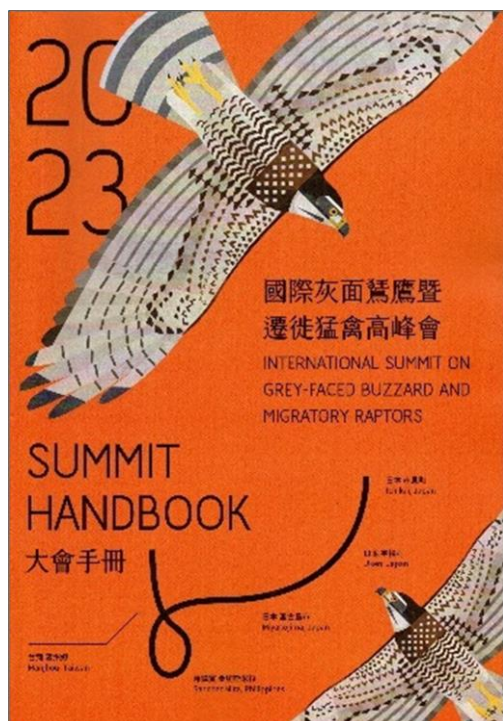
2019年5月25日～26日、第一回の国際サシバサミットが栃木県市貝町で開催された。二回

目は2021年10月16日～17日の両日、宮古島市で開催された(2020年開催予定がコロナ禍で延期)。三回目は2023年10月13日～14日に台湾・満州郷(Manzhou)で、四回目は2024年3月24日～25日、フィリピン、サンチェスミラ市で開催された。

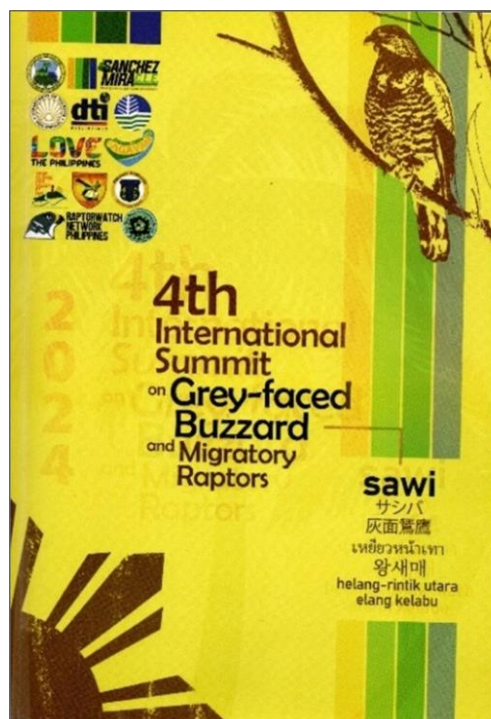
回を追うごとに、参加国も増え、サミットそのものの中味も濃くなり、サシバ保護の機運も高まっている。サシバのフライウェイにある台湾、フィリピンをはじめ、韓国、タイ、マレーシアからも参加しサシバ保護思想の強力な推進に大いに役立っている。

また、台湾、フィリピンの保護活動も軌道に乗り、サシバ密猟も限りなくゼロに近づいている。

改めて、これまで、この国際サシバサミットを取りしきってくれた、日本自然保護協会、日本鳥類保護連盟、日本野鳥の会、アジア猛禽類ネットワークの皆様に感謝したい。

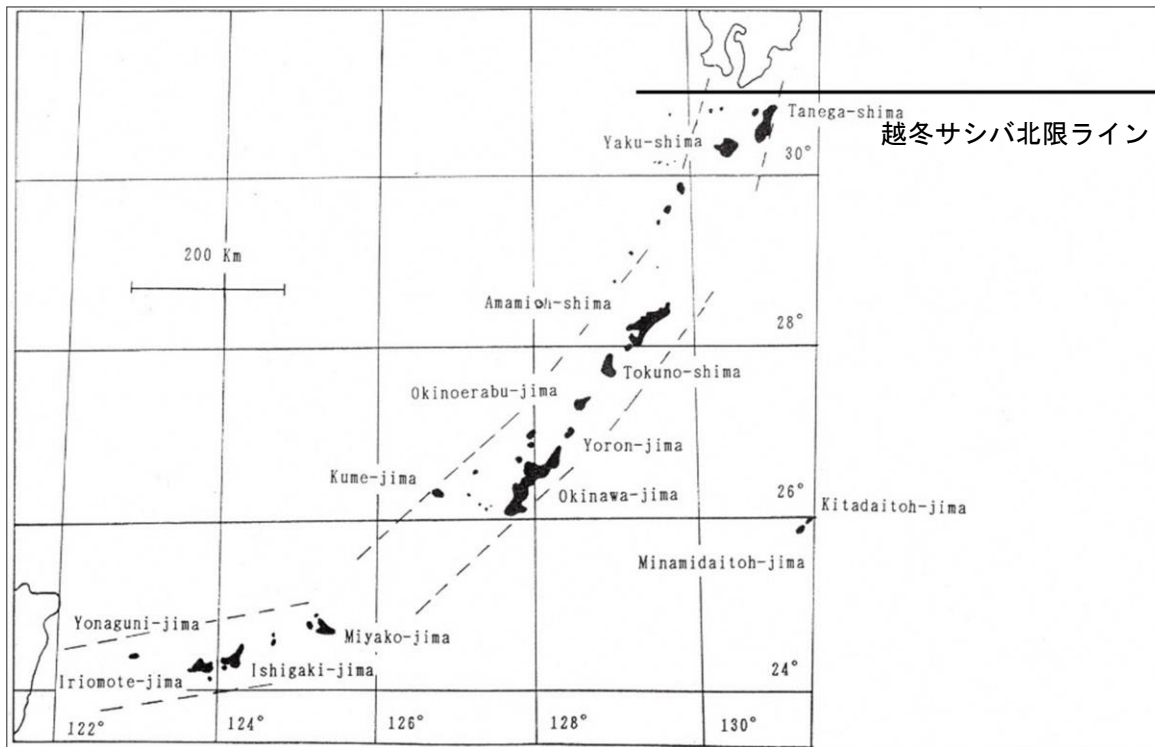


第三回サミット冊子(台湾、満州郷)
2023年



第四回サミット冊子(フィリピン・サンチラ)
2024年

1 南西諸島における秋のサシバ渡りの幅と越冬サシバ



南西諸島におけるサシバの秋の渡り幅と越冬サシバの北限ライン (久貝、1988)

南西諸島を南下するサシバの渡りの幅はどうなっているのだろうか。

1985 年～1987 年の 3 年間をかけて種子島、屋久島、トカラ列島（中之島、諏訪之瀬島、悪石島、宝島）、喜界島、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖永良部島、与論島、沖縄島、渡嘉敷島、伊是名島、久米島、南大東島、北大東島、宮古群島、石垣島、西表島、与那国島の各島で越冬サシバを調査した。シーズン中にサシバが渡来し、通過した島では必ず越冬サシバが見られるからである。その調査の結果、南北両大東島を除いてすべての島で越冬サシバを確認した。その後の調査で、南北大東島でも越冬サシバが見られる年と見られない年があるということが分かった。

南北に弓状に連なる南西諸島の中央部付近で越冬サシバが見られる東端は沖縄島であり、西端は久米島である。その距離は約 120 km でメインの渡りの幅は南西諸島の島々の広がりとはほぼ一致

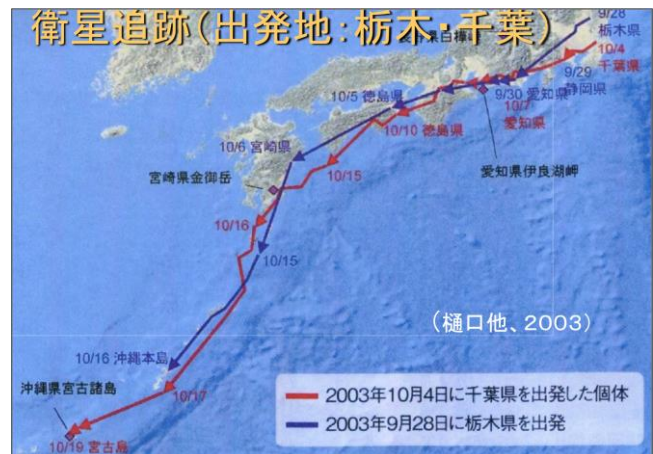
している (久貝、1988、南西諸島におけるサシバの秋の渡りと越冬サシバの生活、県立教育センター研修報告、第 30 期、理科 76 号)。

その当時、正確な数字ではないが、筆者のこれまでの調査結果を踏まえて、種子島以南の南西諸島の越冬サシバは約 3000～4000 羽くらいだろうと推定した。

2 南西諸島におけるサシバの春の渡り

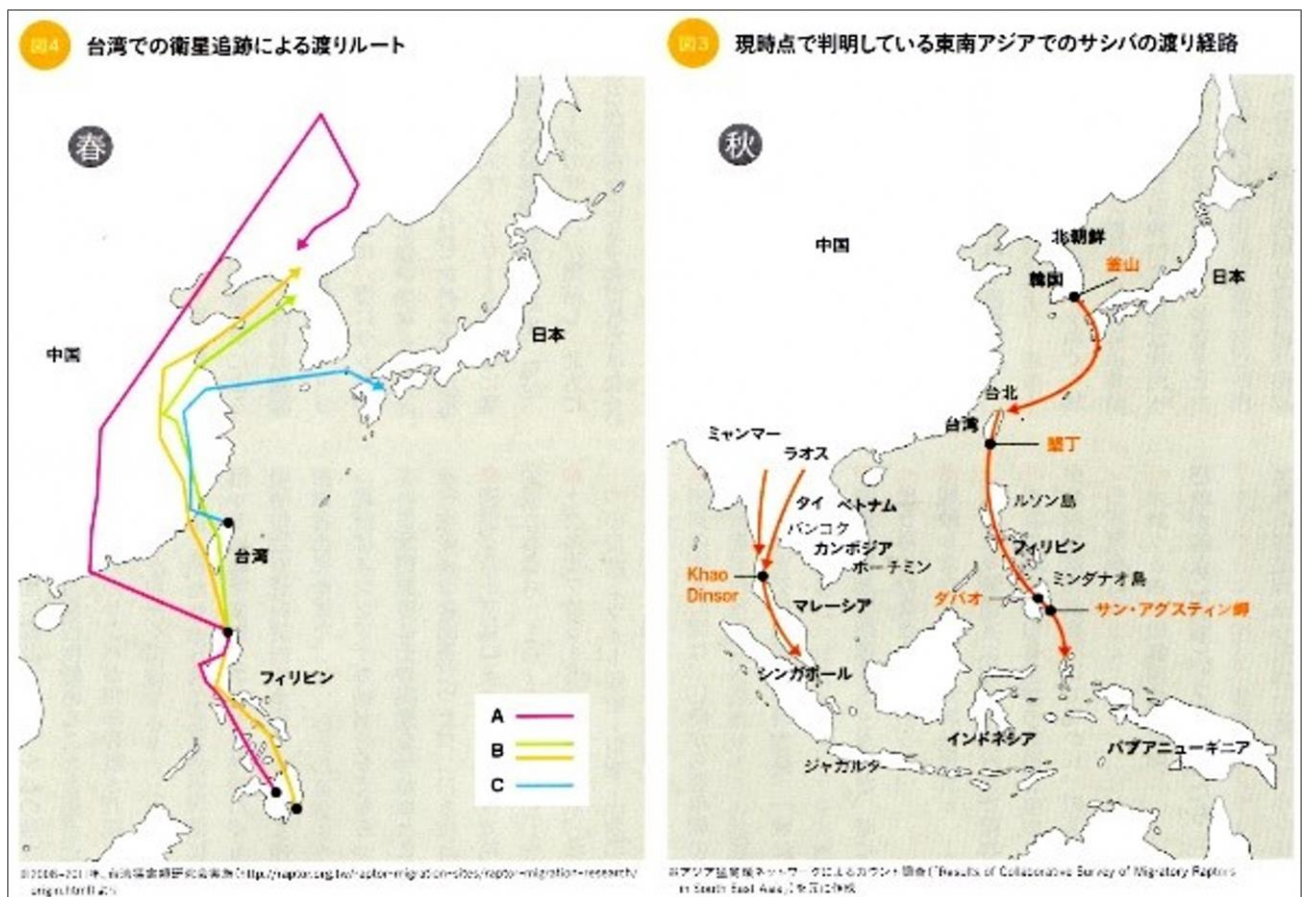
南西諸島における秋の渡りについては多くの研究報告がなされている。しかし、春の渡りについてはまとまった報告はない。今回、樋口、鳥たちの旅（渡り鳥の衛星追跡、日本放送出版協会、2005）を参考にして、南西諸島のサシバの春の渡りをまとめてみた。

樋口は 2002、2003 年にそれぞれ石垣島と宮古島（伊良部）でサシバを捕獲し人工衛星用の送信機を取り付け、その追跡調査を行った。幸運にも、私はその取り付け作業チームに加えてもらった。



衛星による追跡調査により南西諸島で越冬するサシバの春の渡りは秋の渡りとはほぼ同じルートで日本列島へ向かう（樋口、2005）。しかしフィリピン、台湾等で越冬するサシバは大陸沿いに渡り

繁殖地の日本列島には北九州あたりから入る。つまり、南西諸島は通過しないということである(東, 2018)。



2008—2011 年、台灣猛禽類研究会、東、2018、野鳥

3 サシバの島、伊良部の保護活動と国内交流及び国際交流

1985 年頃には下地地区での密猟は無くなった。サシバが一番多く飛来する伊良部地区でもサシバ保護に関する認識が学校を中心に少しずつ広がっていった。その内に地元の伊良部中学校が県の環境教育モデル校を引き受けサシバ保護問題に取り

組んだ。それを機に生徒会も地域の母親の会を巻き込み地域ぐるみで保護運動を展開した。1970 年代に中学生だった子ども達も社会人になりサシバ保護運動に協力するようになった。県立伊良部高等学校（2021 年、閉校）も毎年、サシバ俳句コンテストを実施し、保護活動を後押しした。



伊良部小中学校のサシバ保護キャンペーン



警察官も保護活動に協力（1980 年代、伊良部島）



伊良部小中校、文部科学大臣賞受賞（2022年）
（写真、佐久本 聡）



2024 年 8 月 伊良部小中学校と台湾・長榮大學
交流との交流事業（写真、Dr. Wei-Chin Li）

一方、公益財団法人日本自然保護協会と宮古野鳥の会は沖縄県、宮古島市、地元小中校、三菱地所（株）等と協議会を発足させ、サシバの中継地

で知られる伊良部・下地島で「サシバの森」づくりを強力に推し進めている。



「サシバの森 植栽活動」三菱地所、日本自然保護協会、宮古野鳥の会、伊良部小中学校（写真提供三菱地所、2023 年）

1980 年代後半頃から始まった伊良部小・中学校をあげて取り組んだ、この保護運動は高く評価されている。その取り組みが評価されて 1991 年、2014 年に文部科学大臣奨励賞、2022 年には文部科学大臣賞を受賞した。また、2024 年 3 月 4～8 日の期間、市貝町児童とのサシバを通じた交流学習を推進した。

2021 年の国際サシバサミット宮古島では伊良部小中学校も参加し、市貝町、台湾、フィリピンの子ども達やサシバ保護団体と交流を深めた。

4 宮古の住民とサシバ

この項は、宮古島市教育委員会生涯学習振興課、市史編纂事業で著者が聞き取り調査を行った「サシバと宮古の住民との関り」（久貝、2019）と「いらぶの自然」（1990 年）、「サシバと伊良部」（久貝、1990）からの要約である。

サシバのシーズン中、どのくらいのサシバが捕獲されただろうか。ある故老はシーズン中、一つのツギヤ（ツギ）で 100～150 羽は捕れたと話してくれた。中には一日で 138 羽も捕ったという人もいた。

戦前は宮古全体で約 1,500～2,000 個ものツギヤ（ツギ）が造られたという（故友利恵花私信）。1 個のツギヤ（ツギ）でシーズン中、平均 60 羽前後捕獲されたと言われているので宮古全体で 100,000 羽前後のサシバが捕獲されたと推定される。戦前は、繁殖地の日本列島の自然環境も良好で、サシバの数も順調に増加したのだろう。

宮古ではサシバ飛来のパーク時には、その数があまりに多くて、休息する木が見つからず、そのまま芋畑に舞い降りたと言う。そのことに気づき、夕方、畑に出ている女性たちも芋づるを頭に乘せ

て、じっと座り、サシバが頭上の芋づるに舞い降りると、さっと両手を伸ばして脚を捕らえた。多い時には 4~5 羽も捕らえた（故友利恵花私信）。その当時は大変な数のサシバが宮古に飛来したのだろう。

慶長 14 年（1609）、薩摩の琉球侵攻に端を発した人頭税（住民一人、一人に一律に同額を課す租税。納税者の負担能力の差を考慮しない不公平な税とも言われた）で島民は牛馬のように働かねばならなかったという。島民はサツマイモとその葉や茎、野草などを海水でたき、空腹を満たした。厳しい人頭税が続いた 266 年間、島民は美味なお酒や肉類を口にすることはほとんど、ありませんでした。栄養失調症で苦しむ島民たちは何かに栄養の供給源を見出さねばなりませんでした。

幸いなことに、秋にサシバが大群で飛来しました。サシバのシーズン中は島民の栄養失調症が、いくらか、緩和されたに違いない。宮古では、いつ頃からサシバを大量にとらえて食料にしていたのか、定かではありませんが、この人頭税と関係が有るのかもしれませんが。苦しい食糧難の頃、サシバは島民にとって非常に貴重なタンパク源であり、年に一度の労働の疲れを癒す楽しいハンティングでもあったのである。

その昔、サシバを良く捕獲したという故老の皆さんと話をすると、夜が更けるのも知らずに話が弾む。ツギヤ（ツギ）に入ってもサシバが思うように捕れない日には、皆で車座になり、捕獲したサシバの美男美女（？）コンテストや捕獲数の自慢、一番美味しい料理方法についての話等に花を咲かせた。会話の中では一番きれいな囀（おとり）のサシバを持っている者と、一番条件の良い場所にツギヤ（ツギ）を造った者が皆から羨ましがられたという。

5 サシバ捕獲の獵具、料理、地域住民とのつながり

1) 伊良部島・宮古島

宮古の人達は、サシバと関わった長い歴史の中で世界中、何処にもないような宮古独特のサシバ捕獲方法を考案した。それはツギヤまたはツギと呼ばれるサシバが渡る昼間に利用するサシバ捕獲装置である。

ここでは、伊良部のツギを紹介したい。

まず、リュキュウマツの枝やシイノキカズラ、ススキ、ゲッキツ等でサシバがよく休息しそうなモクマオやリュキュウマツ（地元の人は長年の経験から、何処にあるどの木に、サシバがよく止まるのかをしっている）の真ん中より、やや高めの場所に、人が二人ほど、入れるような小屋を造る。その小屋から約 1、5 メートル上にサシバの止まり木を 2~3 本造り、すでに捕獲されたサシバの囀（おとり）を止まらせる。囀（おとり）に使用するサシバは地元の人達が赤目（方言名：アカミー）と呼んでいるもので、目の色が赤みがかった黄色をし、羽の色も全体的に赤みの強い褐色の雄、成鳥である。このタイプ以外は囀（おとり）には利用しない。なぜ、囀（おとり）のサシバがある特定の雄タイプなのかは、今でも、分かっていない。

囀（おとり）は一番下の止まり木におきます。囀（おとり）には翼の下から背中にかけて、しばった、紐（ひも）がついており、その紐（ひも）は止まり木の下にあるサシバ捕獲装置まで届いている。

宮古に飛来するサシバの群れは早いもので午前 11 時 30 分頃から見られる。一番多く見られるのは、午後 2 時頃から夕方にかけてである。



ツギヤ (ツギ) (1960 年代、伊良部、久貝)



おとりのサシバ (1960 年代、久貝)



サシバ捕獲用のワッカ
(1960 年代、久貝)



捕獲されたサシバ (1960 年代、久貝)



何万羽ものサシバが捕獲され、一部は市場にも出された
(1960 年代、沖縄タイムス社提供)

サシバの群れが近づくと、ツギヤ（ツギ）の中に入り、囿（おとり）のサシバに付いている紐を引っ張り囿（おとり）のサシバをバタバタさせる。飛行中のサシバがその動きに誘われて囿（おとり）の止まり木近くに次々に舞い降りる。サシバが止まり木に止まると、ツギヤ（ツギ）の中にいる人が竹竿の先に取り付けられたワッカ（クロツグの繊維で作られている）をサシバの首に引っ掛けて捕獲する。

高度、約、800～1000mを飛行しているサシバが囿（おとり）のサシバをめがけて弾丸のように飛び込んでくる様子は実に見事である。翼を三角形にすぼめ、空に N 字状の文字を描くようにして舞い降りる。ツギヤ（ツギ）の中にと、ヒューッ、ヒューッと風を切る羽の音や降り立った

サシバがハアー、ハアー息を弾ませる音も聞こえたと言う。

それにしても、800～1000mもの高度で囿（おとり）のサシバを瞬時に見つける視力の鋭さにはビックリさせられる（久貝、2019、宮古のサシバ文化、宮古島市総合博物館紀要第 23 号）。

2) 台湾

台湾ではサシバは国慶鳥と呼ばれ、おめでたい鳥として大事にされている。しかし、1960 年代にはサシバは鉄砲弓矢（Bow-Gun）で大量に捕えられ、タンパク源にされた。その当時を知る Gu Ming-Zheng (Director, Lide Community Development Association) 氏は「一日で 10～13 羽は捕獲できた」と話してくれた。当時は貴重なタンパク源だったのである。



Gu Ming-Zheng, Director Lide Community Development Association



灰面鵟鷹夜棲前會群聚盤旋・靠近人類村落而容易受到干擾及獵捕
Bow-Gun と懐中電灯で捕獲されたサシバ
(1960 年代) (台湾サット、2023)

3) フィリピン

(1) カガヤン州

フィリピン北部に位置するカガヤン州ではサシバのことを Sawi と呼ぶ。春の渡り時にサシバが集団で渡来する場所として知られる。ここでは、春の渡り時に多くのサシバがタンパク源

として捕獲された。フィリピンでは捕獲の方法が3種類ある。一つはパチンコと懐中電灯を利用した捕獲方法 (1960 年代)。二つ目は捕獲小屋を利用する方法 (バタン諸島)、三つめはエアガンの利用である。



パチンコの玉 (石)



懐中電灯とパチンコ
(写真、Napoleon)



筆者と Mr. Napoleon(フィリピン、サンチェスミラ市)

1960 年代、フィリピン北部のカガヤン州ではパチンコと懐中電灯でサシバを捕獲した。その当時、パチンコと懐中電灯でサシバを捕獲したという COULOR NAPOLEON, 70 代は以下のように話してくれた。夜、二人一組でサシバ狩りをした。一晩で 10 羽ほど捕れた。捕獲したサシバはシチュウ（雑炊）にして食べた。

(2) バタン諸島

バタン諸島はバタン島とサバタン島からなる。島の住民にはサシバの秋の集団渡来地として知られる。しかし、このことはバタン諸島の住民以外にはあまり知られていない。バタン諸島はルソン島北部の北、約 200 km に位置する。バタン諸島では 1984 年 10 月にサシバの飛来状況調査と聞き取り調査を行った。



Batan 諸島 (1984、10、久貝)



Batan 諸島の捕獲装置
(1984、10、久貝)



群れの写真
(Batan island, 1984 年 10 月、久貝)



Air Gun で傷ついたサシバ (山崎亨, フィリピン、カガヤン州、2016)

この島ではイヴァナ小学校理科の先生方がサシバについての「パンフレット (がり版)」を作り、そのパンフレットを使用してサシバを含めた環境教育をしている。その英文パンフレットには以下のようなことが書かれている (要約、久貝)。「10 月に入ると、この島ではイヴァナの島民たちが、フィリピンワシに似た Kuyab(クウヤブ)という鳥の到来を待ち望んでいる」。

『Kuyab とは、現地語でサシバのことである。小学校理科教師たちは生徒に、このサシバという鳥は中国のどこか、からやってきて、シベリアの冬には暖かい地域に移動せざるを得ないのだと、さまざまなイラストを使って説明する。サシバはある一定の方向に向かって移動する。

イヴァナとサブタン (イヴァナから約 3 海里、5, 5 km離れた島) は偶然にもその方角にある。サシバが 10 月中旬にやってくると、子供たちは歓声をあげて歓迎する。何万羽もいるため、ペットとして、あるいは食用として、人々は何羽かを捕獲した。サシバ捕獲のために人工のねぐらを用意する元気な若者もいた。人工のねぐらは地面に 4 本の柱 (ヤシの木の幹) を立て、その上に小枝やヤシの葉を置く。これは人工の木で、通常はてっぺんに登るためのはしごがついている。頂上には、疲れたサシバが休む居心地の良い空間を造った。男たちはそのすぐ下に隠れ、サシバがその場しのぎのねぐら (Pongkot) に降り立つと、素手で捕まえた。



Batan 島、捕獲風景
(1984、10、久貝)



Batan 島、捕獲されたサシバ (1984、10、久貝)

通常、これは暗闇の中で行われた。サシバは昼夜を問わず、海や陸を長距離航行し、星や地球の磁力に導かれて長い旅を続けることができる。バタンやイヴァナで一夜を過ごしたサシバは、夜明けとともに南への長い旅を再開する。彼らは 2 月と 3 月の冬の季節の後に戻ってくる。この時、彼らはバタン諸島上空を飛ぶが休息はしない。これらの鳥の一部はカガヤンやイザベラで捕獲されると言われる。いくつかの鳥は時々メッセージのバンド（渡りのルートを確認するために研究者によって装てんされた足環）を持っています。サシバは昼夜を問わず、海や陸を長距離航行し、星や地球の磁力に導かれて長い旅を続ける。地元ではサシバとして知られている。サシバは弱い短足で、強い翼を持っている。サシバは 10 月 13 日に必ずやってくる。この日の前後に、サブタンとイヴァナの梢に降り立つ。イヴァナの人々は、サシバは聖母マリアの鳥だからこの日にやってくると信じている。10 月は聖母マリアの月であり、ほとんどのイヴァナの村では 10 月 13 日が聖母マリアの祝日である』。

この小学校の理科教師達が編集した読み物か

ら、バタン諸島の人々にとってサシバがいかに貴重な鳥であるかを知ることができる。

サシバは午後 4 時ごろから夕方にかけて島に飛来する。この島に飛来したサシバは、疲れを癒すために島民の造った捕獲小屋に止まる。中に隠れている男は素手で素早く足を捕まえる。サシバは木に止まると、まず下を見下ろし、それから習慣のように周囲を見回す。そこで捕獲小屋の中に隠れている男は、サシバが捕獲小屋の中を見下ろす前に捕まえないといけない。サシバを捕まえるタイミングは非常に難しいと言われている。また、この島では渡り鳥の季節には 100 個以上の捕獲小屋が造られ、1 日に 13 羽を捕獲した人もいるという。宮古諸島の捕獲方法と比較すると、非常に興味深い。この島で捕獲された鳥の数は 1 万羽を超えると言われる。宮古諸島とバタン諸島の捕獲方法を比較するのも非常に興味深い。

バタン諸島では、最も古い狩猟方法と推定される独自の狩猟方法が残っている。それは、宮古諸島での猟法（ツギヤ）と似ているが、異なる面が多くある。多分、宮古方式がバタン諸島に伝えられたのではと、推定している。何より

も、決定的な違いは、宮古諸島ではオトリのサシバを使用しているが、バタン諸島では使っていないということである。両島の人々は、懐中電灯と釣り針のついた竹竿を使って鳥を捕まえることもあったという。宮古諸島では渡りの季節になると、地元の人々は空気銃を使わなかったが、バタン諸島では空気銃を使うこともあったようだ。

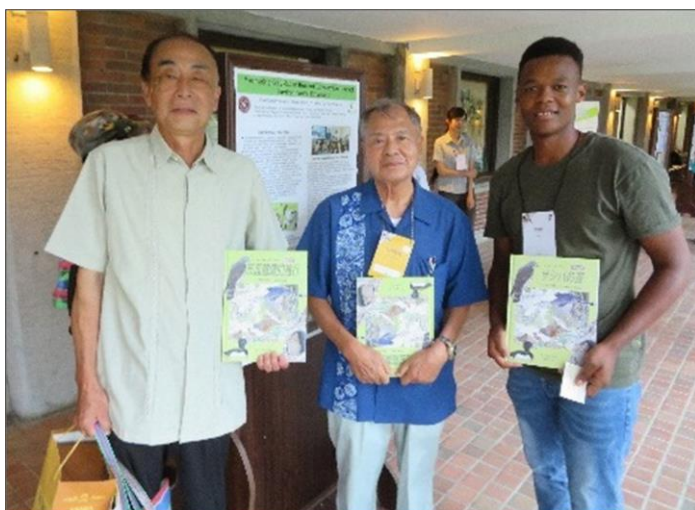
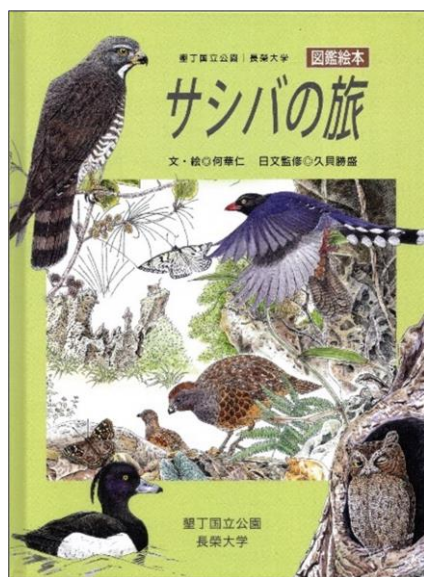
6 国際サシバサミット 1 回～4 回までの概要

1) サシバを通じた宮古島市との交流

- (1) 2005 年 10 月 1 日、5 市町村が合併し新宮古島市が誕生し、これまで伊良部町の町鳥だったサシバが宮古島市の市鳥になった。
- (2) 2017 年 10 月 3 日、日本で一番高密度でサシバが繁殖する栃木県市貝町とサシバの中継地点として世界的に知られる宮古島市がサシバを通じた交流都市協定を結んだ。
- (3) 台湾では毎年建国記念日 (10 月 10 日) 前後に飛来するので、縁起のいい、めでたい鳥 (国慶鳥) として国民に親しまれている。また、台湾長榮大學は「千里の縁サシバが結ぶ日台交流」というスローガンを掲げ宮古島

市の小中学校と交流している。2018 年 9 月宮古島市と長榮大學が国際関係を推進する覚書を締結し宮古島市に日本教育センターの設置している (城辺町舎)

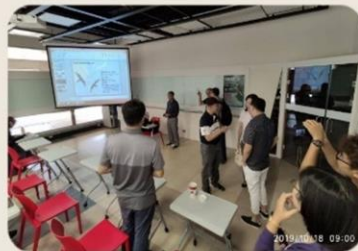
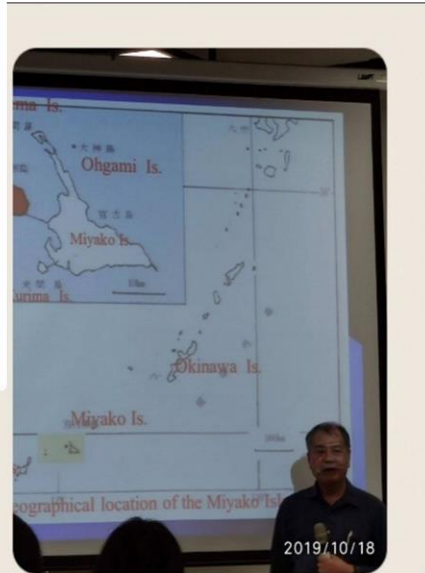
- (4) 2018 年、フィリピンサシバエコツアーに出島、山崎、遠藤、東、葉山、久貝が参加。その反省会の中で国際サシバサミットの宮古島での開催について話し合い。取りまとめ役は日本自然保護協会の出島にお願いをした。
- (5) 2018、10、16 日本自然保護協会 (まとめ役、出島) が主催して県民カレッジ、「宮古から世界に広がるサシバ保護」が開催され大好評をはくした。台湾長榮大學からも Dr. Hsin-Chin Lai, Dr. Kawamura 両氏が参加した。
- (6) 2019、10、3 栃木県市貝町と宮古島市の間でサシバを通じた交流都市協定が締結された。
- (7) 2023 年 10 月 6 日、長榮大學が発刊したサシバの図鑑絵本「サシバの旅」が宮古の小中学校、図書館等へ寄贈された。



2023 年 10 月 6 日、長榮大學が発刊したサシバの図鑑絵本「サシバの旅」、台湾国際サシバサミット会場でも展示

(8) サシバを通じた宮古島市・台湾・長榮大學との交流

(写真提供：長榮大學、李威欽、Wei-Chin Li、2019-2024)



2) 国際サシバサミットの始まり

2018年に山崎亨アジア猛禽類ネットワーク会長の率いるフィリピンサシバエコツアーに以下のメンバー6人が参加した。山崎亨（アジア猛禽類ネットワーク会長）、出島誠一（日本自然保護協会）、遠藤孝一（日本野鳥の会）、葉山政治（日本野鳥の会）、東敦樹（岩手大学）、久貝勝盛（宮古野鳥の会）。その反省会の中で久貝が「サシバ保護に関する国際的なサシバ会議が宮古島でも出来たらいいな」と発言。それを受けて山崎会長の「よし、ネーミングは国際サシバサミットとし、第一回大会を宮古島で開催」というツルの一声で宮古島開催が決まった。帰国後、すぐに宮古島市役所とサシバサミットについて要請。しかし、行政側は計画が突飛で財政的にも厳しいという。いろいろ、相談した結果、遠藤孝一日本野鳥会理事

長が国際サシバサミット第一回大会を栃木県市貝町で開催することを了解していただいた。理事長の大変なご苦勞で第一回大会は大成功裏に終わった。改めて、理事長と市貝町の皆さんには心から敬意を表したい。

3) 第一回国際サシバサミット

第一回国際サシバサミットは2019年5月に栃木県市貝町で開催された。台湾やフィリピンからも研究者や保護団体が参加し、大成功裏に終わった。特筆すべきは「本日、繁殖地、中継地、越冬地、でサシバの調査や保護活動を進めている人たちが日本の栃木県市貝町に集まり、町民とともに第一回国際サシバサミット 2019 市貝大会を開催した」という文言で始まる「国際サシバサミット 2019 市貝宣言」である。また、各地からの子ども達の保護活動報告も大変好評だった。



第一回国際サシバサミット 2019 市貝町宣言文

- 1, 私たちは、サシバの繁殖地、中継地、越冬地全域における取組みの重要性を認識し、国際的な協力・連携のもと、サシバの調査や普及教育、保護活動を推進する。
- 2, 私たちは、サシバの生息には、持続可能な地域づくりや生物多様性豊かな里山の維持が必要であることから、生態系に配慮した農林商工業やエコツーリズムの進捗を推進する。
- 3, 私たちは、サシバ保護はもとより、サシバの生息環境を保存・再生するための制度プログラムや条例等法令を準備していくとともに、国および国際機関に支援を求めて行く。
- 4, 私たちは、上記を実現するために、国際サシバサミットを2020年に宮古島市、2021年にフィリピン、2022年に台湾で開催する。

4) 第二回国際サシバサミット

第一回大会の市貝町の資料等を参考にしながら、第二回の宮古島大会の準備に取りかかった。しかし、コロナ禍や財政的な面でいきづまった。それを、宮古島市環境保全課の皆さん、とりわけ長濱秀明、日本自然保護協会に出島誠一の両氏から、多大なご助言、ご支援をたまわり無事、2021年10月13日～14日の両日、大成功裏に終了した。その前年、2018年10月16日に日本自然保護協会が主催して「県民カレッジ、宮古から世界に広がるサシバ保護」を開催し、宮古島サミットのムードを高めた。2020年開催予定の第二回宮古島サシバサミットはコロナ禍で2021年10月16～17日に延期されON-LINEで開催された。各地の首長や子供たちの活動状況もビデオで流され大好評を博した。また、市貝町産の米を使用した泡盛「寒露の渡り」も好評だった。



第2回宮古島サミット冊子



市貝町産の米を使用して伊良部島（宮の華酒造所）で醸造された泡盛「寒露の渡り」（2021年）

第二回国際サシバサミット 2021 宮古島宣言

- 1, 私たちは、サシバの繁殖地、中継地、越冬地全域における取り組みの重要性を認識し、国際的な協力・連携のもと、サシバの調査や普及教育、保護活動を推進する。
- 2, 私たちは、サシバの生息には、持続可能な地域づくりと生物多様性豊かな自然環境の維持が必要であることから、地域の生態系に細かく配慮した農林商工業やエコツーリズムの振興を推進する。
- 3, 私たちは、サシバの保護はもとより、サシバの生息環境を保全・再生するため の制度、

プログラムや条例等を整備していくとともに、国および国際機関に支援を求めていく。

- 4, 私たちは、上記を実現するために、今後も、国際サシバサミットを繁殖地・中継地・越冬地で開催する。

5) 第三回国際サシバサミット

第三回大会は 2023 年、10、13~14 日、台湾満州郷(Manzhou)で開催。宮古からは嘉数副市長他 3 人が参加した。感動したのは台南市の国民中学校でサシバのシーズンに合わせて猛禽類祭りを開催し、地域や子供たちにサシバを含めた猛禽類の保護を訴えるイベントを開催していることである。



国民中学校で開催された猛禽類祭り



会場を訪れる地域の人達



楽器演奏で祭りを盛り上げる(2023)



長栄大学がかかげるサシバを通した国際交流スローガン(千里の縁・サシバが結ぶ日台交流)

第三回国際サシバサミット 2023 Kenting National Park, Taiwan 宣言 (要約、久貝)

- 1, 国際協力を通じて、サシバの研究、教育、保護を推進し、後世に残す。
- 2, 生物多様性保全の 30×30 コンセプトに基づき、より多くの繁殖地、中継地、越冬地での生息地保護を推進する。
- 3, 伝統的農村景観の「里山」の重要性を認識するサシバにとって 農業、林業、工業、観光業において、環境に配慮した取り組みを推進する。
- 4, 私たちは、渡りをする猛禽類とその生息地の

保護に関連するあらゆる法的規制の強化を提唱し、各国政府と国際機関の協力と支援を積極的に求めます。

6) 第四回国際サシバサミット

第四回大会は 2024 年 3 月 24～25 日、フィリピン、サンチェスミラ市で開催された。回を追うごとに参加国も増え、サミットの中味も濃くなり、サシバ保護の機運も高まってきた。また、サシバのフライウェイ、韓国、タイ、マレーシアからも参加しサシバ保護思想の強力な推進に大いに役立っている。



台湾からの参加者と筆者 (2024, 3)



サシバサミット宣言文検討会議 (2024, 3)



サシバサミット 2024 で座喜味市長のメッセージ代読 (久貝)



フィリピンサミット 2024、参加者

第四回国際サシバサミット 2024 Sanchez Mira, Cagayan, Philippines 宣言(要約、久貝)

- 1, 情報、教育、コミュニケーション運動を毎年継続し、農業学と連携して地元の大学やカレッジで野生生物研究(Wild Studies)を制度化する。
- 2, 科学的根拠に基づく法整備を地方レベルで推進し、国の取り組みを補完する。特にサシバや絶滅の危機に瀕している猛禽類とその生息地に重点を置く。
- 3, 地域の開発計画や投資計画の影響を評価し、クリーンエネルギー(ソーラーパネル、風車など)や商業用地や住宅用地の利用を、サシバやその他の渡り鳥、猛禽類の生息地を危険にさらさないような科学的な配置にするよう、これらの計画を見直す。
- 4, 野生生物の生息地内での動きに対する真摯な敬意と、地元の文化に対する敬意に基づき、エコツーリズムのためのプログラムや方法を革新する。



小中学生による歓迎会(フィリピン)2024



サシバサミット懇親会(フィリピン)2024



第5回サシバサミット開催予定の
奄美大島宇検村元山公知村長(2024)



フィリピンサミット参加者(2024)

まとめ

- ① 南西諸島を南下するサシバの渡りの幅は約 120 km。南西諸島の島々の広がりとはほぼ一致している。
- ② 南西諸島で越冬するサシバの春の渡りは、秋の渡りとはほぼ同じルートで日本列島へ向かう。
- ③ フィリピン、台湾等で越冬するサシバは大陸沿いに渡り、日本列島には北九州あたりから入り繁殖する。春の渡りでは南西諸島は通過しない。
- ④ 伊良部小中学校（結の橋学園）のサシバ保護活動が高く評価され、文部科学大臣賞を受賞した（2022 年）
- ⑤ 公益財団法人日本自然保護協会、三菱地所（株）が中心となって宮古野鳥の会、沖縄県、宮古島市、地元小中学校の協力で下地島で「サシバの森」造りを強力に推進している。
- ⑥ 宮古では戦前、島全体で約 2,000 個ものツギヤ（ツギ）が造られた。
- ⑦ 宮古でのサシバ捕獲猟具はツギヤ（ツギ）とサシバの首に引っ掛けて捕る、方言名バナダキ（竹竿の先端部にクロツグの繊維で作ったワッカを取り付けた猟具）である。
- ⑧ 宮古でのサシバ捕獲には囷（おとり）のサシバが利用された。
- ⑨ 台湾では Bow-Gun と懐中電灯が利用された。
- ⑩ フィリピンでは 1960 年代にはパチンコと懐中電灯が利用された。後にエアーガンが利用された。バタン諸島では簡易捕獲小屋を造り、素手で捕獲した。
- ⑪ 1980 年代、バタン諸島では小学校の理科の教師が中心になってサシバ保護活動を推進していた。
- ⑫ 第一回国際サシバサミットが栃木県市貝町で、2 回サミットが宮古島市で、3 回サミットが台湾で、4 回サミットがフィリピンで開催された。
- ⑬ 開催国ではそれぞれにサシバサミット宣言がなされた。
- ⑭ 第 5 回サミットが 2025 年 10 月に奄美大島宇検村で開催の予定である。

参考文献

- 久貝勝盛、1988、南西諸島におけるサシバの秋の渡りと越冬サシバの生活、県立教育センター研修報告、第 30 期、理科 76 号、pp193～204
- 1990、伊良部の自然編集委員会編著、いらぶの自然（動物編）
- 久貝勝盛、1994、サシバの秋の渡りと集団渡来地の住民とのかかわり、沖縄県立博物館紀要 20 号
- 久貝勝盛、2003、サシバを追う、みえばし印刷樋口広芳、2005、鳥たちの旅、渡り鳥の衛星追跡、日本放送出版協会
- 久貝勝盛、2019、宮古のサシバ文化、宮古島市総合博物館紀要、第 23 号、pp1～25
- International Summit on Grey-faced Buzzard and Raptors, 2023 Summit Handbook
- 2019、国際サシバサミット、市貝
- 2021、国際サシバサミット、宮古島
- 2023、SUMMIT HANDBOOK, INTERNATIONAL SUMMIT ON GREY-FACED BUZZARD AND MIGRATORY-RAPTORS, Manzhou, Taiwan
- 2024、4th International Summit on Grey-faced Buzzard and Migratory Raptors, 23-25 March 2024 Sanches Mira, Cagayan, Philippines

